

著書紹介 青木博史 編 『日本語文法の歴史と変化』

著者	青木 博史
雑誌名	国語研プロジェクトレビュー
巻	3
号	1
ページ	55-56
発行年	2012-07
URL	http://doi.org/10.15084/00000704

青木博史 編

『日本語文法の歴史と変化』

2011年11月 くろしお出版

A5判 xiii + 245ページ 3,000円+税



青木 博史

本書は、国立国語研究所共同プロジェクト「日本語文法の歴史的研究」（独創・発展型、代表：青木博史）による研究成果の1つとして編まれた論文集である。この共同プロジェクトの概要・目的は、以下の通りである。

- 古典文献に基づいた実証的な方法論に加え、現代語の理論研究や方言データも視野に入れ、幅広い視点から日本語文法の歴史的研究を行う。
- 古代、中世、近代、現代のそれぞれにおける各時代語を中心としながら、一時代における共時的な観察・記述にとどまることなく、歴史変化をダイナミックに描く。
- 様々な文法現象を対象とし、どのような記述が歴史変化を「説明」するものとして必要十分であるか、という点に自覚的に取り組んでいく。
- 研究成果については、国内外の学界に向けて広く発信していく。

内容については、テーマを狭く限定することせず、プロジェクトメンバーの個々の現在の研究テーマに基づいて執筆している。1冊の本としてのまとまりにはやや欠けるかもしれないが、日本語文法の「歴史」あるいは「変化」について、「説明」を試みた論文の集積であるという自負は抱いている。観察・記述の段階から説明の段階へと向かっていくことは、本プロジェクトにおける最大の目的である。

以下、各論文の内容について簡単に紹介する。小柳智一「古代の助詞ヨリ類一場所の格助詞と第1種副助詞一」は、古代語の「ヨリ類」（「ヨリ」「ヨ」「ユリ」「ユ」）の意味用法と語性を詳しく観察し、「ヨリ類」が格助詞と副詞性接尾語の2つの側面を有することを述べたものである。同様の語性の幅は「マデ」にも見られ、「ヨリ類」と「マデ」は体系的に対応することも指摘している。仁科明「「受身」と「自発」—万葉集の「(ら)ゆ」「(ら)る」について—」は、万葉集の「(ら)ゆ」「(ら)る」の「受身」用法と「自発・可能」用法の関係について、受身系列3類、自発系列5類に分類した上で、相互関係の整理を行っている。こうした多義を説明するものとして提案されている、「動作主背景化」説と「出来文」説の関係についても論じている。福沢将樹「推移のヌ」は、古代語の助動詞「ヌ」を、「ツ」とともに「動作性アスペクト」の1つとしての「推移系アスペクト」として位置づけることを提案している。「ヌ」の多義性については、意味論的な意味と語用論的に導かれる意味を区別することによって説明を試みている。岡崎友子「指示詞系接続語の歴史的变化についての試論—中古の「カクテ・サテ」を中心に—」は、中古の「カクテ」「サテ」について、指示

詞としての機能の有無からタイプを分類し、その用法と変化を考察したものである。指示機能を段階的に捉えることで、歴史的変化を記述している。吉田永弘「タメニ構文の変遷—ムの時代から無標の時代へ—」は、〈目的〉と〈原因〉を表す「タメニ構文」の変遷を、広い時代幅にわたる多様な資料を用いて描いたものである。構文変化の記述を通じて、「ム」の衰退した領域に無標形が侵出したことを指摘し、その背景には事態の実現・未実現に対する把握の仕方の変化があることを述べている。福嶋健伸「～テイルの成立とその発達」は、12世紀にアスペクト形式としての「テイル」が成立したとする研究の問題点を指摘し、定説どおり15世紀以降と考えた方がよいことを確認する。そして「テイル」と「基本形」と「ウ」「ウズ(ル)」を、アスペクト・テンス・モダリティの「体系」として捉えるべきであると主張している。竹内史郎「近代語アスペクト表現についての一考察—ツツアルを中心に—」は、「ツツアル」が近代における欧文翻訳を契機として書き言葉の世界で発達した形式であり、「ニヨッテ受身文」や「原因主語他動文」などと同様の発達を遂げたものであることを指摘している。さらに、「テイル」を含めた近代のアスペクト体系について考察を加えている。青木博史「述部における名詞節の構造と変化」では、「疾風も龍の吹かするなり」のようないわゆる「連体なり」文の歴史について考察し、「名詞節+繫辞」の構造が歴史を通して保たれたことを主張している。「のだ」だけでなく、「のだらう」「だらう」の構造と変化についても述べている。岡部嘉幸「江戸語の推定表現」は、江戸語において〈推定〉を表す「ヨウダ」「ラシイ」「終止ソウダ」「ノダロウ」の4形式について、その特徴を考察したものである。〈内実推定〉と〈原因推定〉という下位分類を用いることによって、それぞれの形式の分布を説明している。宮地朝子「名詞キリの形式化と文法化」は、「キリ」の諸用法について、中世から近世にかけて動詞連用形名詞から形式化・文法化する過程として説明するものである。接尾語や副助詞など異なるレベルで捉えられてきたものを、名詞句の分布の多様性として捉えている。巻頭には、プロジェクトメンバーである江口正氏による解説を付している。

本書の論文執筆者10名は、40代前後のほぼ同世代の研究者仲間である。「若手」を名乗るにはいささか気が引ける年齢となったが、常に新しいものに取り組み、学界に新風を送り込むという意識は持ち続けていきたいと思う。

青木 博史 (あおき・ひろふみ)

九州大学大学院文学研究科准教授。博士(文学)(九州大学)。京都府立大学文学部講師、同助教授を経て、2009年4月より現職。

2010年4月より国立国語研究所時空間変異研究系客員准教授。

主な著書：『語形成から見た日本語文法史』(ひつじ書房、2010)、『ガイドブック日本語文法史』(共編著、ひつじ書房、2010)、『日本語の構造変化と文法化』(編著、ひつじ書房、2007)。

社会活動：日本語学会評議員・編集委員、日本語文法学会評議員・学会誌委員、日本言語学会評議員・大会運営委員、訓点語学会委員。